

輸送用機器器具製造業

鉄道の安全を担う確かな技能・技術

7-28 東北交通機械株式会社

JR 東日本グループの保全業務を担う

東北交通機械株式会社は、宮城県仙台市に本社を置く JR 東日本や仙台市営地下鉄の鉄道保全全般を担う、JR 東日本グループの会社である。元々は、国鉄の保全業務を、仙台交通機械工業株式会社、盛岡交通機械工業株式会社、秋田交通機械工業株式会社の 3 社体制で担っていた。昭和 48 年に 3 社合併して、現在の東北交通機械株式会社となった。

その業務範囲は、JR 東日本管内福島以北の鉄道車両および部品、駅などの設備機械の開発・設計・施工管理から保全業務全般まで幅広い。



東北交通機械 本社

品質管理を保障する基礎としての技能検定

2009 年 7 月現在、社員約 800 名のうち 500 名を超える技能士を抱えている。うち 1 級が 83 名、2 級が 424 名であり、技能検定合格者の 66%が 30 代と若い。

このように技能検定への取組が広がっていった背景は、「昭和 60 年頃取引先の JR が品質管理の観点から現場職員の技能検定受検を奨励しはじめました。その際に取り引き先であった東北交通機械の利府支店が社員の技能検定受検を始めて、その後全社に広がっていったといわれています」と担当者の摂津氏は答えてくれた。顧客である国鉄が、品質管理を保障するものとして技能検定を活用したことがきっかけで、顧客のレベルにあわせて広がっていったのだ。

東北交通機械では、3 年ほど前に、40 歳以下の若手は技能検定に全員合格、また育成者の 3 割が 1 級に合格するという目標を立てた。これもやはり基本的な品質管理を保障するものであり、「読み書きそろばん」という位置付けで技能検定の合格に力をいれている証拠だ。

複数職種に合格し、業務の幅を広げる技能士

取材に応じてくれた後迫氏は、鉄道車両製造・整備、機械保全（機械系保全）、冷凍空気調和機器施工、プリント配線板製造、仕上げ、機械保全（電気系保全）の合計 6 つの技能検定に合格している。これは、同氏が入社後、台車部品の検収部門、出向先で新車製造の床下配線作業等を担当、その後の配属先ではデジタル列車無線の図面作成や地下鉄車両の製造等を担当してきた。業務も極めて多様で、横断的な業務に携わってきたことになる。このため、後迫氏は担当業務が代わるたびに技能検定を受検し、その結果として 6 つもの技能検定に合格することとなった。

社内での技能競技会によって競争を

基礎技能の育成は、クドバス手法（技能伝承を短期間で行なうために、技能・技術マップを作成することによって可視化をして技能教育カリキュラムを開発する手法）を活用することによって、強み・弱みを把握するとともに、現状の技能を評価して目標を設定している。

また人材育成という観点から、東日本トランスポート、新潟・東北交通機械が参加する技能競技会に年 1 回参加している。毎回、社内の予選会を勝ち上がった約 20 名程度が競技会に参加している。

このように科学的な手法による現状の技能の把握に加えて、若い人たちの高いモチベーションを維持するために競技会を実施している。



社内競技会の様子

東北交通機械株式会社

➤業種: 輸送用機器器具製造業
➤住所: 宮城県仙台市
➤代表者: 矢口弘志

➤設立: 昭和42年
➤従業員: 833名
➤技能士: 507名

技能士へのインタビュー

後迫 直樹氏（35 歳） 2 級鉄道車両製造・整備技能士

末永 勝利氏（38 歳） 1 級電気機器組立て技能士



社会インフラを整備する社会的意義

後迫技能士は、高専の機械工学科出身で入社 14 年目の技能士である。入社動機を「新幹線や在来線といった重要な社会インフラの安全を担っているという、社会的な責任の大きさが魅力でした。」と、鉄道の安全保守という同社の事業の意義を語ってくれた。

後迫氏は入社後、様々な業務を経て、現在は改造グループに所属しており、新幹線や在来線の改造を行っている。これまで、鉄道車両製造・整備、冷凍空調調和機器施工、プリント配線板製造、機械保全（機械系保全）、仕上げ、機械保全（電気系保全）の 6 つの 2 級技能検定に合格している。

もう 1 人取材を受けてくれた末永氏は、高校の機械科出身の入社 19 年目の技能士である。

彼も入社動機を「新幹線のメンテナンスを行っているという社会的なインパクトの強さと会社の業務が安定しているところでしょうか。」とやはり後迫氏と同様、業務の社会的意義について触れていた。

入社後は、車体修繕課で新幹線の窓ガラスの交換等の業務についた後、新幹線の連結部分の検修業務を担っている。同氏はこれまで、1 級電気機器組立て技能士と 1 級空気圧装置組立て技能士の技能検定に合格している。

業務にあわせた幅広い基礎知識を身に付ける

技能検定へ合格したことによる効果をお二人に振り返ってもらったところ、後迫氏は「現在の改造グループは J R の工場に出向いて在来線の改造をしている。主に配電を行っているものの、配管の知識が必要な場面もある。配線は主に配電盤・制御盤組立検定を受検する際に勉強し、配管は主に鉄道車両製造・整備検定を受検する際に勉強した。様々な技能の基礎的なものは身に付けていることが役に立った。」と同社の幅広い業務をこなしていくための幅広い基礎技能の重要性を説いている。

末永技能士は、「空気圧装置組立ての検定に合格することで基礎的な知識をきちんと身に付けることができた。このことによって、これまではメーカー側に意見できなかったものが、メーカーと対等に意見交換できるようになった。」と業務を行っていくうえでのコミュニケーションの土台としての技能検定のよさを語ってくれた。

今後は、業務分野の軸を持ち、中核的役割を

今後の展望を伺ってみたところ、後迫氏は「今後は、たくさんの資格の中から特に配線技術をメインに深めていきたい。何か 1 つのものを深めて、指導的なポジションになっていきたいと考えている。」と答えてくれた。6 つもの検定に合格し、様々な業務を担当してきたからこそ、業務分野の軸を持ち、現場の後輩の指導にあたっていきたいという気持ちが伝わってきた。

また末永氏は「今後は、どの職場にいてもスムーズに仕事を立ち上げることができるようになりたいと考えている。」と語る。2 つの 1 級技能検定に合格し、職場でも中核として活躍しているからこそ、業務全体を視野にいった発言が出てきたのではないだろうか。



普段の業務の様子(後迫氏)

今後受検するみなさん、積極的チャレンジを

様々な資格・検定等の取得や合格をし、活躍するお二人であるが、今後受検をする若手の社員にはどちらも積極的にチャレンジすることを奨めていたことが印象的だ。

後迫氏は、「自分自身は会社から奨められるがままに検定を受検してきた。しかし、これから受検する方々には、必要だと思ったら、自分から全力でチャレンジして欲しい。」と語る。また、末永氏も「自分から積極的にチャレンジして、早くから取り組むことをおすすめする。」と、自分たちの若手への奮起を期待しているようだ。



普段の業務の様子(末永氏)